

Moodle と Line を活用した仮想ホームルーム

中川 卓也* 大向 雅人**

The Virtual Homeroom assisted with Moodle and Line

Takuya NAKAGAWA, Masato OHMUKAI.

ABSTRACT

Homeroom is surely a kind of important session for students to discuss some issues or to plan some events for the class. It often takes far more than scheduled time for discussion. In this article, therefore, the Virtual Homeroom is proposed for the purpose of student's convenience beyond the restriction of time and place while keeping student's autonomy. Moodle and Line systems have been utilized in order to realize the Virtual Homeroom. This article confirms how the Virtual Homeroom works and is effective to the student's advantage on the basis of questionnaires.

KEY WORDS: Virtual Homeroom, Moodle, Line, educational effect

1. はじめに

高専教育の目的は、5年間の教育課程を経た後、社会に出て即戦力となる人材を育成することである。そのためには、技術者としての高い専門知識習得が不可欠である。しかし、社会の評価に耐えうる技術者の育成は、技術者の能力だけでなく、目的意識・社会性・言動・信頼感等の基本的な素養、すなわち人間的な基礎力を身に付けることが重要である¹⁾。一般的に、“人間的な基礎力”は、授業や学校行事等日常生活のすべてを通じて徐々に育成されるものである。“人間的な基礎力の育成”を教育現場で行う場合、すでに行われている授業の中で工夫することが、最も取り入れやすい方法である²⁾。また、一般教育にも関連性が高いホームルーム活動が重要であるという研究報告³⁾もある。文部科学省によるホームルーム活動の定義は、『ホームルーム活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員としてホームルームや学校活動におけるより良い生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自

主的・実践的な態度や生活態度を育てる』⁴⁾とあり、ホームルーム活動には人間的基礎力の育成に効果があると考えられる。

現在の本校におけるホームルームは、本科1~3年生においてはカリキュラムとして週1回導入されているが、本科4・5年生及び専攻科生はカリキュラムに組み込まれていないため、必要に応じてホームルームを行わなければならない現状となっている。

本科1~3年生はカリキュラムに基づいているということもあり特に問題ないが、本科4・5年生及び専攻科生は、授業時間以外に時間を割いてホームルームを行うことに大きな負担を感じているのも事実である。

そこで、学生の負担にならず、かつ、人間的基礎力の育成を目的として、Web 掲示板 (Moodle⁵⁾) と Line⁶⁾ を活用したホームルーム (以後、仮想ホームルームと呼ぶ) を行うことを試みた。

Moodle や Line 等を活用することで、誰もが参加しやすく、積極的な意見交換等が行われることが期待できる。そういった点から、一般的なホームルームよりも時間的な制約がなくなる仮想ホームルームの方が意

*技術教育支援センター、**電気情報工学科

見交換の時間等が増えると考えられる。そのような活発な意見交換が行われることで人間的基礎力の育成により効果があると考えられる。

加えて、仮想ホームルーム導入による教育効果に関して、学生にアンケート調査を実施し、その検証・報告を行う。

2. 仮想ホームルーム導入の検討

仮想ホームルームの導入にあたって、

- ・匿名性は必要か？
- ・無責任な発言等が行われないか？
- ・伝達事項等、確実性があるか？

といった問題点が考えられる。

まず、匿名性については学内の1クラスと限定しての運用であれば、特に匿名性を必要としないと考えられる。また、匿名性を排除することにより、一般のWeb掲示板のように不特定多数の人間が利用する場合は異なり、無責任な発言等もなくなると考えられる。次に、伝達事項の確実性であるが、通常授業やホームルームを行っていても聞き漏らしやもの忘れ等は起こり得る問題である。つまり、個人意識の問題で、伝える側がどうこうできる問題ではないと考えられる。

また、仮想ホームルームを導入した場合、学生側のメリットとしては、

- ・自分の都合の良い時に確認等ができる
- ・何回でも再確認ができるようになる

といったことが考えられる。つまり、ネット環境さえ整っていれば、“学校でないと確認できない”ということはないため、場所や時間に拘束されることは無くなり、都合の良い時に確認できるようになる。さらに、何度でも再確認できるようになるのである。

次に、教員のメリットとしては、

- ・Moodle および Line を活用することで、ホームルーム行うための準備時間や教室で行うホームルーム時間等が短縮できる

といったことが考えられる。

以上のことを考慮すると、仮想ホームルームの導入効果は大きいと考えられる。

3. 仮想ホームルームの導入方法について

仮想ホームルームを導入するにあたり、Moodle と Line を活用することとした。Moodle とは、インターネット上で授業用 Web ページを作るためのソフトである⁵⁾。Line とは、個人間やグループ内においてチャット形式でメッセージをやりとりできるスマートフォン向けの通信アプリケーションである⁶⁾。

Moodle を利用するためにはコース登録を行い、PCもしくはタブレット・スマートフォン等で登録したコースにログイン後に利用可能となる。一方、Line はグループ Line (ここでは教員+受講学生のグループとなる)に登録後、利用可能となる。ただし、Line は Default で通知機能が設定されている。そのため、新たに投稿された意見や議論がディスプレイに表示され、タイムリーなやりとりが可能となる。しかし、スマートフォンを利用していない学生がいる現状において、そのような学生も仮想ホームルームに積極的に参加できるよう、Moodle と Line の両方を導入することとする。

仮想ホームルームの導入ルールとして、

- ・担任が Moodle とグループ Line を立ち上げる
- ・Moodle はクラス登録者のみ利用可とする
- ・グループ Line は Moodle 登録者、かつ、Line ID 取得者とし、個人が特定できる場合のみ利用可とする (匿名利用不可とする)
- ・教室に貼り出す掲示物 (連絡事項等) を Moodle に掲載する
- ・利用者は Moodle を一日一回チェックすること
- ・担任は、自由な発想を生かしつつ、メンター (Mentor : 指導者・助言者の意味) としての役割を果たす
- ・必要に応じてホームルームを行う

こととする。

仮想ホームルーム導入のキーポイントは、

- ・利用者は無責任な発言をしないよう個人を特定できる状態であること
- ・Line ID を取得していない学生もいるため、利用者は Moodle のチェックを一日一回行うこと
- ・担任は、メンターとしての役割を果たすこと。つまり、仮想ホームルーム内での自由な発想と対話による気づきと助言によって、学生の自主的・主体的な発達を促す役割であること

だと考えられる。

4. 仮想ホームルーム導入とアンケートの実施

仮想ホームルームの導入については“5Eクラス”において試みた。なお、このクラスを選択したのは、

- ・5年生は、進学や就職といった進路 (人生の岐路) 選択がある
- ・学園祭に加え、見学旅行等のイベントが多い

ということもあり、本科4年生や専攻科生よりも自主性・主体性等が問われる場面が多いと思われる。また、専攻科に進学した学生においては、追跡調査を行いやすいというメリットも大きい。そのため、仮想ホーム

ルーム導入の効果が反映されやすいと考えられる。

また、平成 28 年 2 月末に仮想ホームルーム導入に関してアンケート調査を実施した。設問内容は、

- Q1. ホームルームをオンラインで行って良かったですか？
- Q2. 仮想ホームルームに Line を導入して良かったですか？
- Q3. 担任が〇〇（個人名）で良かったですか？

の 3 問とし、導入の効果の関連について明確な回答を得るため、設問に対して回答を選択する形式とした。また、それぞれの設問に対して自由記述を付け加えた。

5. 仮想ホームルームにおける具体的事例

実際に仮想ホームルームを導入することによって起こった主な事例を紹介する。

5・1 クラス委員の選出について

主な事例の一つ目として、進級決定後から始業式が始まるまでの間（約 3 週間程）に行われたクラス委員の選出に注目した。簡単な流れを図 1 に示す。

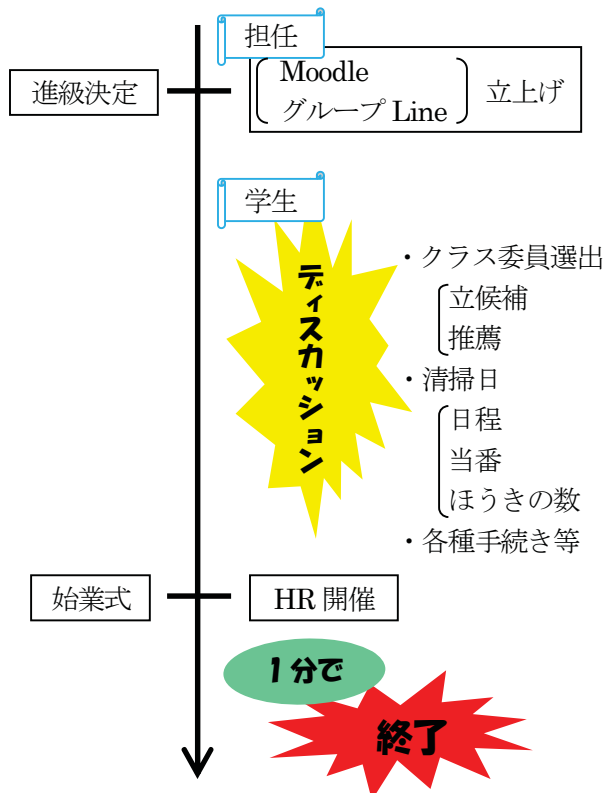


図 1 クラス委員選出の流れ

図 1 より、クラス担任は、学生の進級が決まった日に Moodle とグループ Line を立ち上げた。すると、学生は Line 上で様々な意見を出し合いながらディスカ

ッションすることとなった。具体的には、クラス委員の立候補や推薦、教室清掃の日程や当番に関するだけでなく、雑巾の数やほうきの本数に至るまで、詳細に案を出し合っていた。それらの案をまとめ、Moodle に掲載し、始業式までに各自確認することとした。

始業式当日、教室にてホームルームを行ったが、Moodle に掲載した案を説明後、議決を行うという極めてシンプルなものであった。そのため、わずか 1 分で終了となり、実に効率的な結果となった。

5・2 Moodle への掲示について

主な事例の二つ目として、Moodle への掲示について注目した。前章でも述べたように、基本的に教室へ掲示するものを Moodle に掲載することとしているので、Moodle への掲示は、

- ・学生の呼び出し
- ・保護者面談等の日程
- ・球技大会や学園祭に関する連絡事項

といったクラスを運営していくために必要なものである。しかし、本仮想ホームルームにおいては、

- ・大学の編入・進学募集要項一覧
- ・成績の開示

に関しても掲示することとした。

そこで、大学の編入・進学募集要項一覧と成績の開示について詳述する。

まず、大学の編入・進学募集要項一覧について述べる。今までの大学の編入・進学募集要項に関する大まかな流れを図 2 に示す。

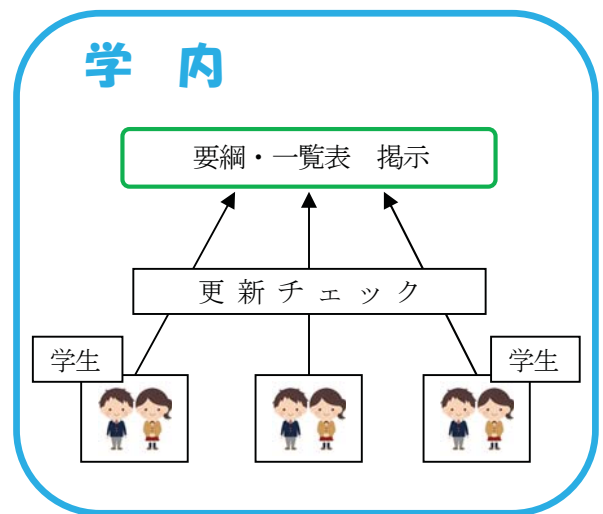


図 2 今までの募集要項とりまとめの流れ

図 2 より、大学側から送られてきた募集要項を“大

学名・募集学科・人数・願書受付期間”等を一覧表にまとめ、学内に掲示する。学生は募集要項一覧表が更新されているか随時チェックを行うという仕組みとなっている。

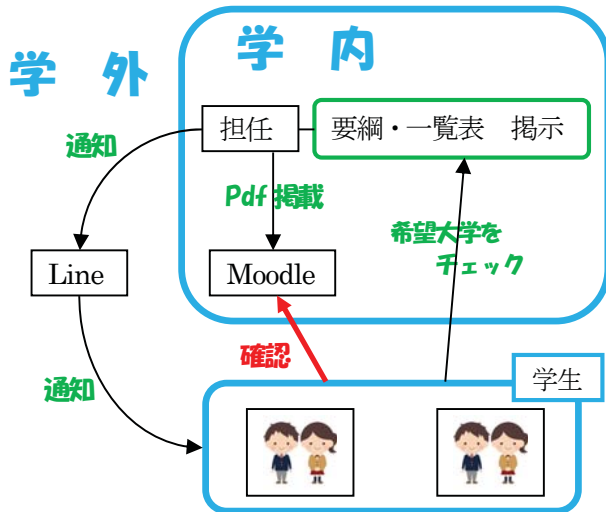


図3 仮想ホームルームに
募集要項一覧を掲示した場合

一方、仮想ホームルーム (Moodle) に募集要項一覧表を掲載した場合を図3に示す。

大学側から送られてきた募集要項の掲示を行うところまでは図2と同じである。大きな違いは、担任が募集要項一覧表の pdf データを、

- ・ Moodle へ掲載する
- ・ Moodle へ掲載したことを、グループ Line で通知する

の2点を行うことである。

そうすることで、Moodle をチェックした学生、もしくはグループ Line の通知を受けて Moodle をチェックした学生は必要に応じて進路資料室へ確認しに行くだけで良くなる。

次に、成績の開示に関して述べる。今までの成績開示の流れを図4に示す。

図4より、担任は配布する成績資料の準備・作成を行う。配布準備ができれば、学生に成績配布のアナウンスを行う。学生は休み時間や放課後の都合の良い時に教員室へ出向き、成績資料を受け取る。なお、前・後期の期末試験の成績については、休み期間中に取りに来るか、もしくは休み期間明けまで待たなければならない。

一方、仮想ホームルームにおける成績開示の流れを図5に示す。

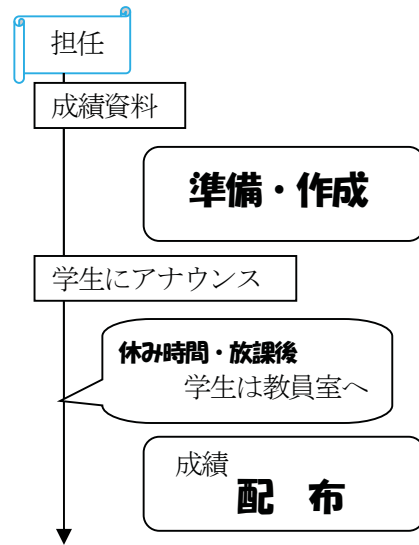


図4 今までの成績開示の流れ

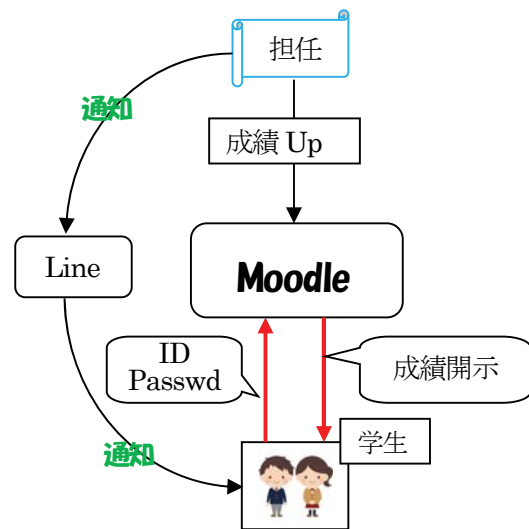


図5 仮想ホームルームにおける成績開示の流れ

図5より、担任は成績を Moodle に掲載する。Moodle に成績を掲載できたら、グループ Line を使って学生に『Moodle に成績を掲載した』旨の通知を行う。通知を受け取った学生は、都合の良い時にパソコンもしくはスマートフォンをから、ID とパスワードを入力して Moodle にアクセスする。Moodle にログインした学生は成績が開示される。このように仮想ホームルームにおいて、学生は時間と場所を選ぶことなく、都合の良い時に成績を確認することができる。教員は成績を受け取りに来た学生の対応に追われることがなくなり、時間的にも気持ち的にも余裕が生まれる。

5・3 見学旅行について

本校においては、5年生の秋になると学科毎に見学旅行を実施している。これは各学科の担当がそれぞれ独自に企画するもので、専門分野にかかわる工場見学に加え、遊園地やラフティングといった人間関係をより豊かにすることを主眼とした要素を取り入れたものが多い⁷⁾。2015年の見学旅行は九州となった。九州が選ばれた理由は、交通費ばかりにお金をかけず、見学旅行の内容を充実させるためである。

その他の理由としては、

- ・旅行プランを競合させ、学生同士でディスカッションを行わせること
- ・ディスカッションを行うことにより、学生自身が納得できる旅行内容にすること
- ・ディスカッションを通して、自主性・主体性を育てること

である。見学旅行において、

- ・旅行プラン内容の決定
(どこに行きたいか?何をしたいか?等)
- ・見学先での班分け等
- ・宿泊の部屋割り
(宿泊場所の諸事情により、宿泊日毎に決める必要がある)

に至るまで、決めなければならないことすべてを仮想ホームルーム上で行うこととした。本章では、見学旅行に関して、プランの提案から決定に至るまでの一連の流れについて詳述する。まず、見学旅行プラン決定までの一連の流れを図6に示す。

図6より、

- ①担当が旅行代理店に見学旅行の内容について要望を伝える
- ②複数の旅行代理店から見学旅行プランに関する提案が行われる
- ③担当が提案された複数の見学旅行プランをMoodleに掲載し、学生にLine通知を行う
- ④学生が複数の見学旅行プランをチェックする
- ⑤複数の見学旅行プランに関して、学生同士でディスカッションを行い、担当を経由して旅行プランに対する要望を代理店に伝える
(最終的に2プランに絞るまで①~⑤を繰り返す)
- ⑥最終2プランをMoodleに掲載する
- ⑦オンライン上で投票を行い、見学旅行プランを決定する

といった流れで見学旅行プランの決定が行われた。特に、見学旅行プランの決定に至るまでの学生同士のディスカッションにおいては様々な意見や要望が飛び交

っており、学生自身納得のいくプラン内容に仕上がる結果となった。

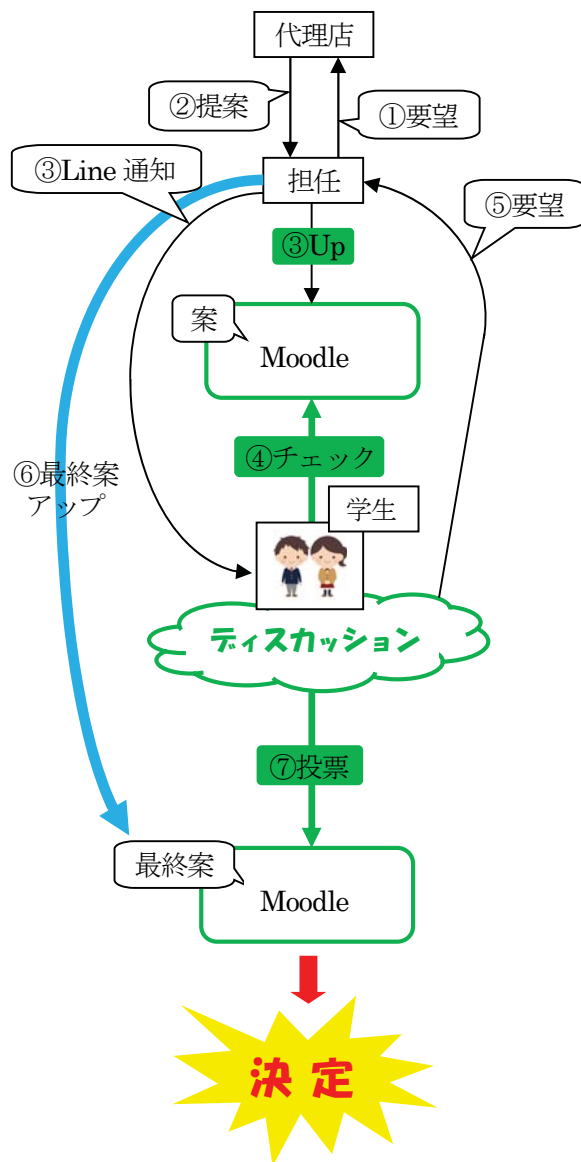


図6 旅行プラン決定までの流れ

5・4 学生のLine活用法

本章では、こちらが思いもよらない学生のLineの活用方法について紹介する。それは、グループLineを活用した掲示連絡等の共有についてである。

授業変更や休講の通知は、学生が利用する入口玄関横に設置されている掲示板に貼り出される仕組みとなっている。今までの掲示連絡の仕組みを図7に示す。

図7より、以前から、学生における掲示板の見落とし等は少なくない。例えば、授業Aと授業Bを相互に入れ替えた場合は問題にならないケースが多い。特に問題となるのは、放課後への振替授業のケースである。

他の授業との調整が難しかったため、仕方なく放課後に振替たのだが、授業中に振替のアナウンスを行い、掲示板に授業振替の掲示を行ったにもかかわらず、振替授業を受けに来た学生が少なすぎて授業を実施することができず、振替授業自体が休講となった事例もあった。

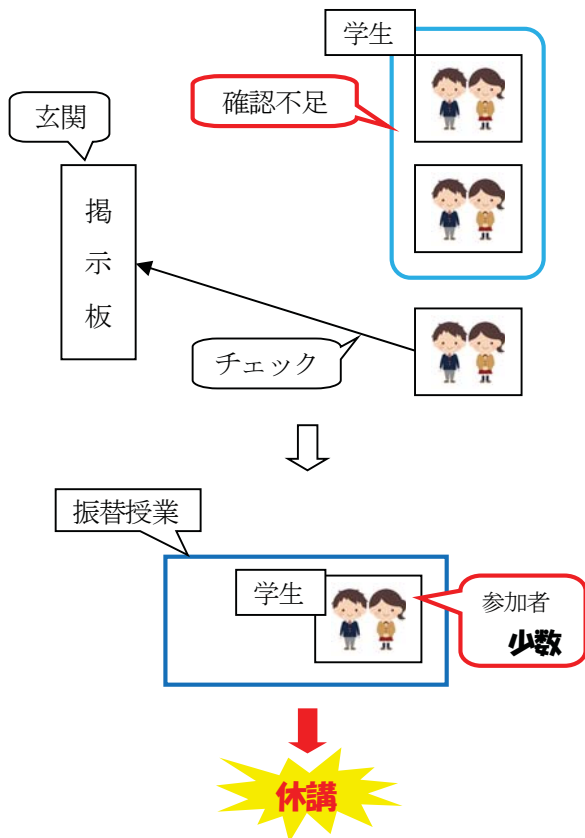


図7 今までの掲示連絡の仕組み

一方、Line を活用した掲示連絡等の共有について図8に示す。

図8より、

- ①ある学生が玄関入口の掲示板を確認し、連絡掲示があれば写真を撮る
- ②撮った写真をグループ Line にアップする
- ③他の学生がグループ Line から通知・確認を行う
- ④写真をアップした学生に『いいね』を送る

といった流れとなる。

このように、グループ Line をうまく活用すると、授業変更等の情報共有が簡単にできるだけでなく、都合の良い時に再確認も容易となるメリットがある。そうすることで、学生の確認不足等も減少し、振替授業の休講もなくなると考えられる。

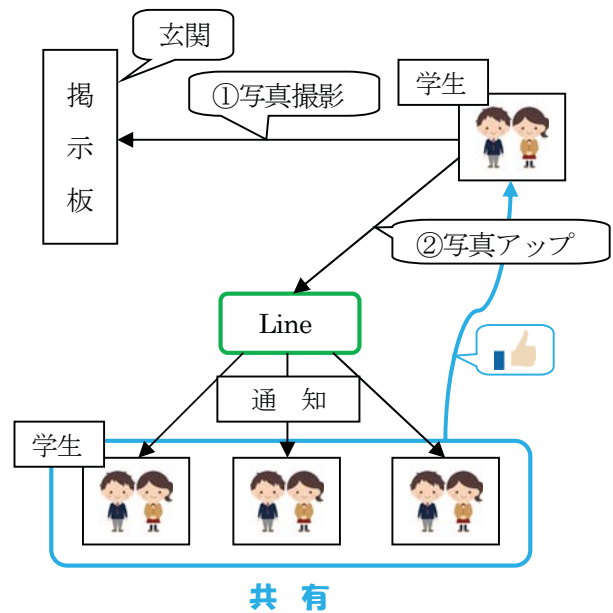


図8 Line を活用した掲示連絡等の共有について

6 アンケート結果と考察

仮想ホームルームに関するアンケートを Moodle 上において行った。それらが学生に対してどのような効果があるのか検討を行う。

6・1 仮想ホームルームについて

最初に、“Q1. ホームルームをオンラインで行って良かったですか？”の問いに関するアンケート結果を図9に示す。

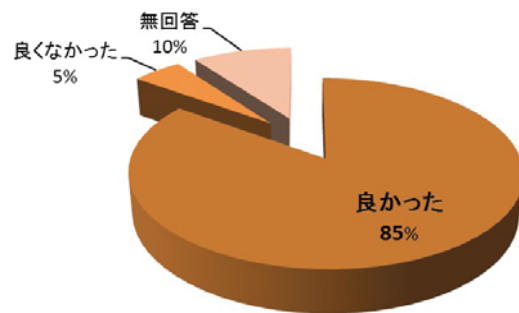


図9 仮想ホームルームについて

図9の問いに関して、平成27年度は40人中34人(85%)の学生が良かったと回答している。自由記述について学生アンケートを直接引用すると、

- ・いつでもどこでも確認できるのが良い
- ・集まる必要が無いのが煩わしくなくて良い
- ・手軽でよかった
- ・時間を取られなくてよい

- ・文字としていつでも確認できて便利だった
- ・情報伝達が確実、かつ、確認が容易で良い

といった意見があり、仮想ホームルームの導入は、なかなか好評価であったと考えられる。

少し変わった意見として、

- ・時間割にない HR（ホームルーム）をするのが疑問だった

- ・PDF 良い

といった意見があった。“時間割にない HR（ホームルーム）をするのが疑問だった”という意見は、ホームルームを頻繁に行わなくても、仮想ホームルームを行うことによって学生側の負担が軽減されて良かったという意見ではないかと考えられる。また、“PDF 良い”という意見は、端的な表現ではあるが、大学進学の見学要項や教室に貼り出す掲示物等（連絡事項等）を Moodle 上に PDF ファイルで掲載していたことが良かった、つまり、学校に行かなくても自分の都合の良い時に気軽に確認できることが良かったということを言いたかったのではないかと考えられる。

その一方では、

- ・意見を言い出しにくい感じがあった

との意見もあった。これについては、

- ・主な意見交換が Line 上で行われていたこと

- ・Line 上でまとまった意見を Moodle に掲載していたこと

- ・Line ID を取得していない学生が 2 名いたことを踏まえると、Line ID を取得していない学生は Moodle 上にてある程度まとまった意見を知ることになるので、自分の意見を言い出しにくかったのではないかと考えられる。

以上のことをまとめると、

- 仮想ホームルームの導入には効果があると考えられる。

6・2 Line の導入について

次に、“Q2. 仮想ホームルームに Line を導入して良かったですか？”の問いに関するものを図 10 に示す。

図 10 の問いに関して、平成 27 年度は 40 人中 30 人（75%）の学生が良かったと回答している。自由記述に関しても、

- ・内容を見返せるため良かった
- ・クラスメイトとの連絡手段にもなり、便利でした
- ・楽でした
- ・簡単に担任と確認が取れるからよい
- ・Line は使いやすかった

- ・Moodle までアクセスしなくて楽だった
 - ・連絡がわかりやすい
 - ・呼び出しなどリアルタイムでわかってよかった
- といった意見があり、Line 導入についてもなかなか好評価であったと考えられる。

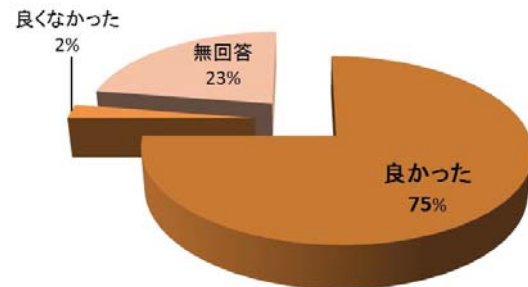


図 10 仮想ホームルームに Line を導入することについて

その一方では、

- ・Line が無い人への配慮がもっとあった方が良い
- ・Line を使えないので困りますし、使いたくなるという理由もあります

との意見もあった。こういった意見から、

- 単に Line を導入して良かったというだけでなく、他人に対する思いやりや配慮等、思った以上の効果があった

と考えられる。また、

- クラス全員によるグループ Line 導入が望ましいということがいえる。

6・3 担任のメンターとしての役割について

最後に、“Q3. 担任が〇〇（個人名）で良かったですか？”の問いに関するものを図 11 に示す。

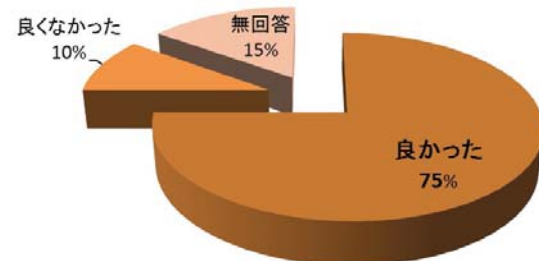


図 11 担任のメンターとしての役割について

図 11 の問いに関して、平成 27 年度は 40 人中 30 人（75%）の学生が良かったと回答している。自由記述

に関しても、

- ・ホームルームを Line にしてくれたからよい
- ・親身でよかったです
- ・楽しかったです
- ・必要最低限の HR (ホームルーム) で楽でした
- ・見学旅行案がまとまるのが早かったし楽しかった

といった意見があった。

少し変わった意見として、

- ・細かいことを気にしないからよかった
- ・質問がすぐに帰ってくるからよい

といった意見があった。

以上のことから、担任のメンターとしての役割はなかなか好評価であったと考えられる。

その一方では、

- ・もう少し丁寧な報告や日時を言ってほしいです
- ・説明不足の時が多々ありました

との意見もあった。繁忙期等において、学生への連絡をうまく伝えることができなかつたのではないかという反省点も残る。こういった意見も踏まえ、総合的に判断すると、

- 担任はメンターとしての役割を十分果たしていた
- メンターとして役割を果たしていたが、その一方で反省点も残る

と考えられる。

6・4 まとめ

仮想ホームルームにおける具体的事例、および、これまでの考察をまとめると、

- ・仮想ホームルーム導入には効果がある
- ・仮想ホームルームへの Line 導入は、思った以上に効果がある
- ・単に Line を導入して良かったというだけでなく、他人に対する思いやりや配慮等、思った以上の効果があった
- ・Line はクラス全員参加が望ましい
- ・担任はメンターとしての役割を十分果たしていた
- ・メンターとして役割を果たしていたが、その一方で反省点も残る

となる。

仮想ホームルームを導入することによって、学生は時間に縛られることなく自由、かつ、より細かな内容を決めることができ、普通にホームルームを行った場合よりも充実したホームルームを実践できたと考えられる。以上のことを踏まえると、

- 仮想ホームルーム導入には十分な効果があり、学生の自主性・主体性をより強く育む教育効果がみられた

ということがいえる。

7. おわりに

本論文では、仮想ホームルームを導入し、その効果について論じた。学生のアンケートの結果からも好評価が得られ、仮想ホームルーム導入に関しては効果が得られたことが分かった。しかし、学生を誘導する担任のメンターとしての果たす役割がかなり重要であると考えられる。それらを念頭において、少しでも多くのクラスに仮想ホームルームの導入が望まれる。

参考文献

- 1) 湊田邦彦, 村田秀明, 湯治準一郎: “基本プランに基づく高専におけるホームルーム活動の実践”, 高専教育, 第 55 号 Vo.3, pp. 165-170 (2007).
- 2) 経済産業省: 2009: 「社会人基礎力 育成の手引きー日本の将来を託す若者を育てるために」 河合塾.
- 3) 岩本晃代: “高等専門学校における教育課程と教員の資質向上に関する一考察ー全国機関調査をふまえてー”, 九州大学大学院教育学コース院生論文集, 第 10 号, pp 51-67(2010).
- 4) 文部科学省: 2009.7: 「高等学校学習指導要領解説 特別活動編」.
- 5) 奥村晴彦: “三重大学 Moodle の構築と運用”, 薬学図書館, 52 卷(3 号), pp. 254-257(2007).
- 6) 西川勇佑, 中村雅子: “Line コミュニケーションの特性の分析”, 東京都市大学横浜キャンパス情報メディアジャーナル, 第 16 号, pp. 47-57(2015).
- 7) 大向雅人, 宮本行康: “電気情報工学科 5 年の海外見学旅行”, 明石高専研究紀要, 第 51 号, pp. 17-20 (2008).